

「一橋研究」総目次 第I号～第IX号 (1955年～1962年)

論 説

	筆 者 名	号	ページ
〔商学関係〕			
管理会計論の課題——経営計画との関連において——	市 村 昭 三	II	(71～ 93)
商品取引所の価格保険機能	田 内 幸 一	II	(94～109)
資産分類と期間所得の算定	久 野 光 朗	III	(3～ 22)
経営学の対象に関する一考察	田 島 壮 幸	IV	(4～ 15)
応用科学としての経営経済学 ——モクスターの所論に関する一考察——	田 島 壮 幸	VI	(11～ 19)
〔経済学関係〕			
日本経済の発展と貿易	大 沢 悦 治	I	(4～ 14)
所得分析における分配論的接近	塩野谷 祐 一	I	(15～ 29)
価格理論をめぐる資本主義経済と社会主義経済の相違	山 田 良 治	I	(30～ 41)
イギリス独占資本形成に関する一分析視角	清 水 嘉 治	I	(42～ 51)
最小自乗法の基礎と計量経済学におけるその適用	宮 川 公 男	I	(52～ 62)
商品経済の価値機構——価値形態論の一考察——	高須賀 義 博	II	(110～130)
Technology and Industrialization	Takashi Tsuru	II	(131～138)
資本蓄積論への道	花 輪 俊 哉	III	(23～ 36)
定常確率過程の経済分析への応用	溝 口 敏 行	III	(37～ 50)
貸付資金説と流動性選好説	志 田 明	IV	(30～ 41)
マルクス貨幣論の研究	加 藤 寛 孝	V	(33～ 48)
適度人口	南 亮 進	V	(49～ 62)
逐次モデル	神 田 祐 一	VI	(20～ 26)
不完全競争と経済変動過程	松 田 芳 郎	VI	(49～ 57)
消費支出における職業効果の分析	神 田 祐 一	VII	(1～ 6)
農家の消費行動の計量経済学的分析	山 沢 逸 平	VIII	(7～ 14)
唐代における均田法・租庸調法の反復公布と括戸政策	中 川 学	IX	(1～ 12)
〔法学関係〕			
英米割合運送賃論	魚 谷 増 男	I	(63～ 72)
アメリカ法における取締役の常任委員会について	藤 田 洲 雄	II	(26～ 35)
ストライキと労働契約——独逸新派の理論——	喜 多 実	II	(36～ 47)
米国海上運送業者の運送品の滅失毀損に対する責任	魚 谷 増 男	II	(48～ 70)
外国人夫婦に対するわが国の離婚裁判権	海老沢 美 広	III	(51～ 63)

A. コックス「労働協約上の権利」	坂本重雄	III (64~77)
米国抵触法上の二・三の問題点	畑場準一	III (78~100)
「資本主義の法律的基础」について	青木英夫	V (5~18)
所有権とその社会的作用	松島由紀子	VI (27~36)
会社支配と取締役	青木英夫	VII (7~12)
コンツェルン指揮と取締役	青木英夫	VIII (1~6)

〔社会学関係〕

レックス・サリカ研究の発展	石川操	II (3~25)
Significance of Chicago as the Material of American Literature	Akira Yajima	III (101~109)
イギリス経済史研究の一潮流—R. H. トーニーの評価を中心として—	森本義輝	III (110~111)
徳島県の僻地教育	高橋義寛	VI (42~47)
「利潤率の傾向的低落の法則」について	篠原三郎	VI (48~54)
若きロックの思想形成について	中村恒矩	VI (55~76)
ディルタイの認識論	安田良雄	VI (77~80)
モーゼス・ヘスの社会主義	畑孝一	V (19~32)
「自然に帰れ」とは——ルソーの学説——	中島厳	V (63~73)
日本のナショナリズムとデモクラシー——大井憲太郎の位置——	石原保徳	VI (37~56)
資本蓄積と資本主義の腐朽化について	宇藤義隆	VII (13~18)
1844年におけるマルクスの価値論	藤森俊輔	VII (19~24)
「イーゴリ遠征物語」における人間像	中村喜和	VII (25~30)
ロシア芸術音楽における民族性の構造	大塚明	VIII (15~20)
Turgot の歴史意識の構造と論理	渡辺恭彦	IX (13~24)
モンテーニュにおける理性の二重性とその現実認識の構造 ——宗教改革と宗教戦争とをかれはいかにうけとめたか——	高橋誠	IX (25~34)

研 究 ノ 一 ト

〔商学関係〕

単独決定原理と共同決定原理について ——グーテンベルクの所論を中心として——	平田光弘	VI (58~62)
リトルトン学説の一考察——メイの論争を中心にして——	藤本美佐子	VIII (39~44)
工業生産の結合法則について	平田光弘	IX (35~38)

〔経済学関係〕

マルクス経済学におけるプランの一問題点	熊谷一男	I (78~80)
クラインの所得の定義について	加藤寛孝	I (87~89)
カレッキーの独占度について	長谷田彰彦	I (90~93)
個人所得分布構造の変動		

——昭和29～33年の高額所得の遷移を中心にして——	松田 芳 郎	VII (31～ 36)
耐久消費需要の分析	島 久 代	IX (39～ 44)
〔法学関係〕		
拒否権と国際連合における新動向	小長谷 和 高	I (74～ 77)
ローマ法継受研究ノート	勝 田 有 恒	V (74～ 83)
スペイン商法のいわゆる客観主義について	中 川 和 彦	V (84～ 87)
起訴陪審について——主として米国の制度——	居 林 次 雄	VI (63～ 68)
韓国の離婚実態	金 震 燮	VIII (21～ 26)
コニオン・デモクラシーと組合自治		
——イギリス組合自治制限の法理を中心にして——	竹 内 規 治	VIII (27～ 32)
〔社会学関係〕		
ウェーバーの社会主義論	林 武	I (81～ 86)
17世紀モンゴル史書「ジャラ・トージ」とその周辺	田 中 克 彦	VI (69～ 74)
カザフスタンの文化活動家——チョカン・クリハーノフのこと——	田 中 克 彦	VII (37～ 42)
社会的所有としての商品と価値の実体規定について	中 野 雄 策	VII (43～ 48)
ニュー・ディール期におけるアメリカ労働運動		
——CIO成立史——	長 沼 秀 也	VIII (33～ 38)

書 評

H. A. メシチェルフスキ「古代ロシア語訳における ヨセフス・スラウィウスのユダヤ戦史」	中 村 喜 和	VI (75～ 83)
ヘルマン・ハインベル「小さな提琴, 首府ミュンヘンの一少年」	阿 部 謹 也	VII (55～ 60)
オーギュスト・コルニュのヘス研究	畑 考 一	VIII (45～ 52)
J. クロブシ「政治と経済——アダム・スミスの原理の一解釈」	星 野 彰 男	IX (51～ 56)

資 料・講 演 ほか

学問と現実について	上 原 専 禄	VI (1～ 10)
一橋大学大学院生の経済生活	学生会 理事会	VI (84～ 90)
1953年スペイン有限会社法	中 川 和 彦	VII (49～ 54)
シンポジウム——学問と現実——	学生会 理事会	VIII (53～ 61)
ベネズエラ有限責任会社法	中 川 和 彦	IX (45～ 50)